

和歌山病院での実習を終えて



安藤 愛里

呼吸器内科の臨床実習のうち二日間を和歌山病院で実習させていただきました。特に印象的であったのは結核の講義と胸部レントゲンの講義です。

病院に到着してすぐの駿田副院長の結核の講義では、感染経路を深く理解することから感染対策を行うという、感染症の基本でありながら自分が理解しきれていなかった部分の講義を受けることができとても勉強になりました。今回は結核に焦点を当てた講義でしたが、今後他の感染症を考えるときにもそれぞれの病原体の特徴を理解することが重要だと学ぶことができました。講義後、理解が深まってからの結核病棟の見学では、医療者がN-95マスクをつけること、それぞれの空間を陽圧、陰圧にすることが、結核の特性からしたら当然のことと感じられ、単なる暗記ではなく考え理解していくことが大事だと再認識した。

胸部レントゲンは普段の病棟実習で担当患者さんを持つと必ずと言っていいほど検査所見を書いてきたのにも関わらず、初見の胸部レントゲン読影をきちんとできるかといわれたら自信がなく苦手意識のある分野でした。南方院長の講義では、導入として「影絵とレントゲンの違い」からスタートし、基本である影のできる仕組みから考えることで、これまでもっていた苦手意識がたった数時間で少しずつ減っていくのを実感しました。

南方院長がおっしゃっていたように、私たちの記憶力には限界があります。試験前、勉強時間が足りないからと理解もせずに丸暗記し試験後すぐ忘れることの繰り返しというのは思い返すとその通りでした。二日間の実習を通して、講義では考える時間が与えられ、普段自分がいかに考えず、十分ではない記憶力に頼っていたのかに気づくことができました。和歌山病院での実習は全体として非常に応用のきく実習であり、この経験をどれだけ価値のあるものにするかは今後の自分次第です。考え分析する能力が重要だと教えてくださったからには、今後の臨床実習、試験勉強、さらには医師として働くようになった際には、自分で考えて理解しているかを時々自問自答しながら学び成長していけるよう努力します。

最後になりましたが、お忙しい中貴重な機会をくださった南方院長、駿田副院長、和歌山病院の方々、本当にありがとうございました。